石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第363号 平成26年1月1日発行

当館企画展

あなたが選んだ 石川県立美術館 名作の森

国宝「色絵雉香炉」 野々村仁清

「蓬莱之棚」 松田権六

「1982年 私」 鴨居玲

新春優品選 ―前田家の調度― 前田育徳会尊経閣文庫分館

- 展覧会回顧「能島芳史展」「加賀藩の美術工芸」
- 講演会記録
- ミュージアムレポート
- 所蔵品紹介

新年のご挨拶

館長　嶋崎　丞

木村雨山「麻地友禅瓜模様振袖」

あけましておめでとうございます。

三月までの本年度は、当館が開設されてから三十周年の節目に当たります。三十周年を記念して、当館の収蔵品を県民の皆さん方に選んで頂き企画した「名作の森」の展覧会が、開催中であることはご承知の通りです。この展覧会を通じてつくづく感じたことは、石川の地の芸術文化が、伝統に裏打ちされた他の地域ではあまり見られない、独自の重厚な個性を持っているという事です。そうした芸術文化が、どちらかといえば私共の日常の生活に溶け込んでいて、あまり気付かないことがあるのではないかと思った事です。この名作の森の展観を通して、石川の地の地域文化を見つめ直し、誇りを持って頂く機会になれば幸いです。

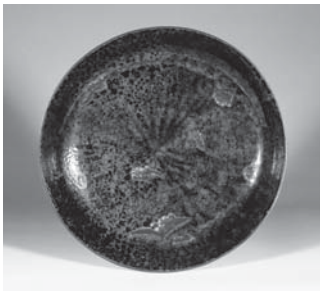
いよいよあと一年で北陸新幹線が開業することになりました。幸いなことに今度の開業は、この石川金沢の地が終着点になるために、多くの旅行客がやってくることは間違いないといわれています。そうした旅行者の多くは、石川、金沢の地に育まれている芸術文化に、ある種の期待感を持ってやってくるのではないかと思われます。

芸術文化は、その地域がどんな地域であるかを理解するには、最も手っ取り早い手段であるといわれ、そうした芸術文化の実物をコレクションしているのが、美術館や博物館、それにコンサートホールなどの文化施設です。従って石川の地のこうした文化施設では、この地域ならではのすぐれた芸術文化を選りすぐって展示活用し、旅行者を迎え入れ、もてなす心の準備を怠ってはなりません。この名作の森の展観が、そうした役割を担うプレイベントにつながれば幸いと思っています。

石川県立美術館は今年、開館三十周年を迎えました。昭和五十八年十一月、それまでの美術館（現在の石川県立伝統産業工芸館）から現在地へ移り、作品点数一、三一三件でのスタートでした。旧館時代から「色絵雉香炉」「古九谷」の美術館として全国にも知られていましたが、古美術から近現代美術まで、工芸から絵画・彫刻などすべての分野にわたる総合的な美術館として今日の姿になりました。そして今年、所蔵作品は三、二二〇件にまで増えています。

石川県は、江戸時代から加賀藩主前田家の保護育成政策により文化の華が開き、その伝統が今日まで継承されています。歴史的名作が伝来している上に、作家の層も厚く、数多くの作家が日本芸術院会員・重要無形文化財保持者（人間国宝）の認定を受けており、水準の高い美術工芸の盛んな地域として知られています。

これらをふまえ、当館の作品収蔵は「石川県の芸術的個性を活かした地方色豊かな美術館」という考え方に基づいて行われています。地域文化の集積をめざし、石川ゆかりの美術・工芸作品を中心に収集を行ってきました。その作品をご覧いただくのがこの「石川県立美術館 名作の森」です。



県文「青手桜花散文平鉢」古九谷

開館30周年記念　第1～9展示室

あなたが選んだ 石川県立美術館 名作の森

平成25年12月21日（土）～平成26年2月11日（火・祝）会期中無休

九月より行った人気投票は、下表のような結果となりました。得票数の多かったものを上位三十位まで紹介しています。県民の皆さんの投票をもとに、美術館の名宝・名作を選ぶ視点から、美術館学芸員の選抜による作品もあわせて展示し、得票数が同じ作品には順位をつけました。第7・第8・第9展示室では貸出中などの例外を除き高順位の作品を中心に展示します。あわせて寄託いただいている作品や、当館を代表する名品の数々を二階コレクション展示室で展示することで「石川県立美術館 名作の森」を構成しました。

関連事業

◇講演会
平成26年1月19日（日）午後1時30分～
演　題　「石川県立美術館 名作の森」
講　師　嶋崎　丞　石川県立美術館長
会　場　石川県立美術館　ホール
聴講無料

◇ギャラリー・トーク
1月5日から毎日曜日　午前11時～
会　場　石川県立美術館　企画展示室

吉田三郎　山羊を飼う老人

順位	分類	作品名	作者名
1	古 陶磁	色絵雉香炉	野々村仁清
2	工 漆工	蓬莱之棚	松田権六
3	近 油彩画	1982年私	鴨居玲
4	近 油彩画	フードの女I	高光一也
5	古 陶磁	青手桜花散文平鉢　古九谷	
6	近 書	澹	表立雲
7	工 陶磁	燿彩鉢	三代 徳田八十吉
8	近 日本画	行雲流水	岩田崇
9	近 油彩画	望郷を歌う	鴨居玲
10	近 日本画	飛鳥をとめ	安田靫彦
11	工 陶磁	燿彩鉢「極光」	三代 徳田八十吉
12	近 日本画	長江の朝	横山大観
13	工 陶磁	葆光彩磁チューリップ文花瓶	板谷波山
14	工 染織	麻地友禅瓜模様振袖	木村雨山
15	古 陶磁	色絵鳳凰図平鉢　古九谷	
16	古 漆工	蒔絵梅椿若松図重箱	尾形光琳
17	工 人形	木彫加彩人形「つつ井筒」	下口宗美
18	近 彫刻	軍鶏	長谷川八十
19	古 日本画	虎図	岸駒
20	近 彫刻	山羊を飼う老人	吉田三郎
21	近 日本画	龍田姫之図	紺谷光俊
22	工 陶磁	色絵山水図大鉢	初代 徳田八十吉
23	近 油彩画	大地の塔	山田勝明
24	古 陶磁	色絵雌雉香炉	野々村仁清
25	古 日本画	四季耕作図	久隅守景
26	近 油彩画	熱叢夢	宮本三郎
27	工 漆工	平文南飛箱	大場松魚
28	工 染織	友禅訪問着「白砂青松」	石田巳代治
29	古 陶磁	色絵鶴かるた文平鉢　古九谷	
30	工 金工	加賀象嵌孔雀香炉	高橋介州

◆観覧料

	個人	団体（二十名以上）
一般	八〇〇円	六〇〇円
大学生	六〇〇円	四〇〇円
高校生	二〇〇円	一〇〇円

※当館友の会会員は受付での会員証提示により団体料金になります。

横山大観　長江の朝

前田育徳会尊経閣文庫分館

新春優品選

－前田家の調度－

平成25年12月21日(土)～
平成26年2月11日(火・祝) 会期中無休

石川県立美術館は開館三十周年を迎えました。言うまでもなく、この前田育徳会展示室の展示も三十年の節目となりました。その間には、毎年十回以上の展示替えを繰り返しながら、「前田家の文化」を様々な角度から公開してきました。展示は大きく二種類に分類され、寄託品の美術工芸品を中心とした作品によるテーマ展示と、東京の(公財)前田育徳会より借用して開催する特別陳列があります。近年の特別陳列は、前田育徳会の所蔵品の個性を象徴する「尊經閣文庫名品展」や「加賀藩の美術工芸」をシリーズ展示として、作品の保存と公開の兼ね合いを考慮しながら、貴重な国宝や重要文化財の公開の機会を設けており、遠方からのファンの皆様も少なくありません。二〇一五年春の北陸新幹線開業は、首都圏からの一層の誘客が期待されます。まだまだ認知度の低い石川県立美術館の存在をPRするには、この展示室の意義は大きなものがあると思われます。(公財)前田育徳会のご協力のもとで、さらなる石川の文化拠点としての魅力を発信していきますので、ご期待ください。

今回の展示では、寄託品の中から茶道具、能装束、婚礼調度、さらには屏風や陶磁器・漆芸品など幅広い分野の作品約三十点により、大名家を飾った調度をご覧いただきます。

玳皮盞天目茶碗(梅花天目)

第1～9展示室

名作の森 みどころ

古美術のみどころ

今回の人気投票で、最多得票は仁清の「色絵雉香炉」でした。当館を代表する名品で結果は予想どおりと言えましょう。二番手は「青手桜花散文平鉢」次いで「色絵鳳凰図平鉢」と古九谷が続きました。九月から十月の投票期間に展示されていた作品が大半の中で、岸駒「虎図」や久隅守景「四季耕作図」は根強い人気を裏付ける結果となりました。投票いただいた作品はできるだけ展示することとしましたが、秋月等観「西湖図」は現在修復中で残念ながら展示できませんでした。

県文 色絵鳳凰図平鉢

近現代工芸のみどころ

今回ご投票いただいた中で、近現代工芸部門のトップは、松田権六作《蓬莱之棚》でした。予想はしていましたが、やはりこの作品は、近代の日本工芸史に輝く傑作であるといえます。そのほか、重要無形文化財保持者や日本芸術院会員の方々を中心に、当県を代表する作家の作品が得票されています。全体的に見て、戦後から現代にかけて制作された作品が多数を占めますが、明治・大正期の優品も展示する予定ですので、石川の近代工芸を概観する内容になることと思われます。

蓬莱之棚 松田権六

純粋美術の見どころ

近現代の絵画・彫刻・書の投票では、鴨居玲「１９８２年 私」、高光一也「フードの女Ⅰ」、安田靫彦「飛鳥をとめ」、横山大観「長江の朝」、宮本三郎「熱叢夢」、長谷川八十「軍鶏」、吉田三郎「山羊を飼う老人」、表立雲「澹」、といった作品が上位に上がっていました。順当なところと思いますが、「えっ」という意外性もあって、大変興味深く、この投票結果を踏まえ、学芸員の思いを交えて展示いたしますので、ご期待ください。

高光一也 フードの女Ⅰ

特別陳列　　特別陳列

「能島芳史展」・「加賀藩の美術工芸」

ともに会期：10月18日（金）～11月17日（日）

能島芳史展

展覧会をご覧になった方は、まず真っ黒な展示室に驚かれたのではないでしょうか。本来当館の壁面は薄いベージュ色の布クロス貼りなのですが、今回能島氏の「漆黒の中に浮かび上がるように作品を展示したい」という強い思いに答えるべく、黒い不織布を張り巡らせ、照明はスポットライトのみといたしました。一八〇センチ幅の黒布を壁面高に合わせて切り、少し重ねては垂らしていったのです。不安を感じていたのですが、結果はまずまずのものであったかと思います。開館以来三十年、初めての黒い展示室が誕生しました。

近年の能島氏の作品は、合板のパネルに何層も塗り重ねた平滑な白亜地を作り、その上に油彩でミイラ化したカボチャを巨大かつ緻密に描いていくというものです。黒い壁面に白い白亜地がスポット光で浮かび上がり、大変幻想的な空間になっているとの声を多くいただきました。中には、説明するまで、筆と絵具で描いた絵画とは思わず、液晶かあるいはスクリーンに映った映像と思って展示室を回ってらっしゃった方もおいでで、能島氏が目録に寄せられた"絵画自体が輝く発光体となり深い空間を宿してよみがえるのだ"という一文が、まさに実体験となったわけでした。

会期が終わり、作品を撤収して展示室を元の白い壁面に戻したのですが、今回は、とても名残惜しく感じた次第でした。

加賀藩の美術工芸

加賀藩が文化政策に心血を注いだのは、幕藩体制を生き抜く知恵でした。対江戸幕府で外様大名が取り得る道は、強大な軍事力を保持して外圧をはねのけるか、面従腹背として、表面的には幕府に従いつつも幕府への対抗心は、しっかり表明することでした。そして前田家が取った道は後者でした。加賀藩の文化政策は、大きく収集と育成に大別されます。今回の特別陳列では、収集された名品として「新猿楽記」、「祭礼草紙」、周文筆と伝えられる「四季山水図」、雪舟筆と伝えられる「四季花鳥図」（以上、重要文化財）を展示しました。そして会期が日本伝統工芸展金沢展とも重なったことから、加賀藩の美術工芸育成事業を象徴する重文「百工比照」から色漆類、羽織類絵図を展示しました。

このうち、「祭礼草紙」は当館の開館一周年記念展以来実に二十九年ぶりの展示となり、全国的に大きな話題となりました。展示期間を前期・後期に分け、全容を公開したことでも好評をいただきました。まだまだ謎の多い「祭礼草紙」ですが、画面の展開を一連の流れとして追いますと、そこには確かにストーリーが見えてきます。そしてこの点が、本作の大きな魅力となっています。

今回は「新猿楽記」（康永本）も二十年ぶりに展示しました。作品を拡げてみて、この書物がいかに広く読まれ、愛好されていたかが伝わってきました。こうした作品の息吹にふれて頂く機会を、今後も鋭意設けてゆきたいと思います。

「皺の軌跡」講師：木下 晋氏

平成25年10月5日（土） 美術館ホール

＊ステージ上には当館所蔵の木下晋作「想望」と、9Hから9Bまで20種の鉛筆を用いて作成した二十枚の濃度見本がグラデーションをなすように展示してある。冒頭で鉛筆の持つ表現力と生い立ちを語り、作品画像をプロジェクターで投影し解説と思いを語られた。

まず最初にこのグラデーションを近寄って見てほしい。鉛筆で絵を描こうと思ったとき、鉛筆がどれだけの表現力を持っているかを知るため、こうしたグラデーションを作ってみた。これは二十種だが、現在は10Hから10Bまで二十二種類ある。美しいでしょう。絵描きには美が羅針盤だ。美に導かれて描く。老婆を描いていて一般的には美と思えないかもしれないが、私にとっては間違いなくそこに美がある。

この「想望」は、鉛筆の濃淡を選択して、油絵で絵具をパレットに出すように、グラデーションすべてを使って描いたものだ。

私は、富山県の生まれで、中学生の時に、木内克先生の弟子の方が富山大学で行っていた公開講座で彫刻を勉強し、家ではクレヨンで絵を油絵のように描いていた。高校一年の時に木内先生の紹介で上京して麻生三郎先生に作品を見てもらい、勧められて自由美術に出品した。十六歳で初入選し、「公募展に史上最年少で入選」ということで大変な騒ぎになった。一種の「天才少年現る」という感じだった。その後、瀧口修造氏や「気まぐれ美術館」の洲之内徹氏などとの交流が始まり、洲之内さんの現代画廊で個展を開くようになるが、中々芽が出なかった。

昭和五十七年に、ニューヨークに作品を持って行ったが、全然認めてもらえなかった。この頃同系色の色を重ねていくという私のスタイルは行き詰まっていた。色が重くなって単色に近くなってしまう、いっそモノトーンの方がと思い立ち、鉛筆で描こうと考えた。

瞽女の小林ハルさんに出会ったのはこの後しばらくしてからだ。初めて彼女の唄を聞いたときは驚愕した。ハルさんは生後百日位で全盲になったから普通の人が見るような、視覚を通した色の概念はない。視覚以外の残った感覚を駆使して生きてきた。でも、彼女の話す言葉から、話す風景には鮮やかな色を感じる。ハルさんを描くことで、「色とは何なのか」ということを学んだ。

私は障害のある人やホームレスの人などをよく描くから、好んで選んでるのかと聞かれるが、そうではない。その人の存在感に圧倒され、どうしても描きたいと思って頼み込むのだ。だけど、すぐに描けるような人はまずいない。ハルさんの場合は一年間かかって実現した。あの深い皺には生きてきた軌跡が刻まれ、いろんなことを語っている。私にとって絵を描くことは、モデルとなった人を知ることで自分の人生を重ねていく作業といえる。何作もハルさんの見えない目をアップで描いたが、この目は混沌とした二十一世紀を見据えている目だと思う。

ハルさんの次ぎにモデルを願ったのは元ハンセン病患者で盲目の桜井哲夫さんだった。この二人は私が生涯をかけて描いて来た人達だった。大変な勉強をすることができたと思う。

本稿は、木下氏の語られた講演内容から、当館の文責で一部を要約したものである。

ミュージアムレポート

どこでもミュージアム／アートかるた

今年度の学校出前講座も最終月を迎え、十一月は白山市の湊小学校、小松市の向本折小学校、金野小学校、羽咋市の余喜小学校、加賀市の湖北小学校、志賀町の富来小学校の六校で開催というハードスケジュールで進められました。作品の搬出入にも気を遣う季節となりましたが、授業が始まり展示会場で作品を前に目を輝かせている子どもたちと出会う時、この出前講座を開講できた喜びを感じます。出前講座では学校での一時限を使って、アートゲーム、対話型鑑賞、最後には自由鑑賞と、いろいろなパターンでの鑑賞方法を体験してもらっています。その日初めて出会う作品や私たち学芸員とのやりとりで行われる授業のため、毎回スムーズな流れになるとは限りませんが、今後も出前講座を継続して開講し、子どもたちに作品を鑑賞する楽しさを伝えていきたいと思います。

十一月十日、特別陳列「能島芳史展」のキッズプログラム「アートかるたを楽しもう」が開催されました。「アートかるた」とは、作品がかるたでいうところの"絵札"。そして、"読み札"を作品をどう捉えたかという鑑賞者の感性でつくります。いろいろな要素で構成された幻想的で不思議な世界の能島先生の作品の魅力に引き出され、参加者は徐々に読み札づくりの楽しさにはまり、最終的には参加者それぞれが複数枚の読み札を完成させました。そして、できた読み札を読み上げ、どの作品か当てるのも、また、楽しい活動でした。残念ながら参加人数は少なかったもの、この「アートかるた」の活動をもう一度！という要望が出るほど好評な活動でした。

一月の行事予定

■百万石の文化講座　午後1時30分～　美術館ホール　聴講無料

12日(日)　第3講　富姫の八条宮家輿入れと前田利常
講師：見瀬和雄氏（金沢学院大学教授）

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料

11日(土)　氷見晃堂と石川の木工芸　寺川和子　学芸専門員

18日(土)　金沢の文化と茶道　高嶋清栄　学芸第二課長

25日(土)　宮本三郎の構図　二木伸一郎　普及課長

■映像ギャラリー　午後1時30分～　美術館ホール　入場無料

5日(日)　心ありき　陶芸家、にんげん板谷波山（46分）
日本美術史1　縄文・弥生・古墳時代　呪術の形と装飾（25分）

■講演会　午後1時30分～　美術館ホール　聴講無料

19日(日)　石川県立美術館 名作の森　嶋崎 丞　当館館長

■名作の森ギャラリートーク　要観覧料

1月5日、12日、19日、26日、2月2日、9日の日曜日。
11時より企画展示室にて

「和」わ　昭和36年(1961) ブロンズ 第四回新日展　文部大臣賞

所蔵品紹介239

畝村　直久 うねむら・なおひさ　明治42年(1909)～昭和37年(1962)

ポーズを違えた三人の女性群像で「知・情・意」の統合としての「和」を謳い上げた作品。三体の有機的な繋がりの中、女性的な豊かさを湛えながら一つのフォルムと空間を形成しています。当館エントランスホールでも長らく展示していたこともあり見覚えのある方も多いことと存じます。さて本品は昭和五十八年の当館開館の年の原型寄附で、当館のブロンズ作品中一番の大物で作者の代表作です。既にこのようなコーナーで紹介済みかと思いながらも古くからの『だより』をめくってみると意外に寄附の年での紹介以降、平成二年の「畝村直久とその一門展」での簡単な紹介以外では「主な展示品欄」で僅かに掲載されるのみ。偶然とはいえ、まるでこの開館三十周年記念「名作の森」号のために残ってくれていたようです。

さてたいへんな重量も誇る当品は、常々「大きな女性像は作るな」と言っていたという作者にとっては破格の作品。将来を嘱望された作者が五十三才で急逝する前年の第四回新日展文部大臣賞受賞作であり、最期の力を振り絞った渾身の作であることが窺えます。

畝村直久は金沢市生まれ。県立工業学校から東京美術学校へ進み、帝展～日展で活躍しました。しっかりした基礎に立つ人体具象を中心に、モダンなセンス溢れる作品を残しています。

次回の展覧会

会期:2月15日(土)～3月22日(土)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室
前田家の天神信仰 —天神画像と文房具—	刀剣の美

第3展示室	第4展示室	第5展示室	第6展示室
春を待つこころ	ムナカタとオモテ	截金 人間国宝 西出大三	春を待つこころ

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円(280円)
大学生　280円(220円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
毎月第１月曜日はコレクション展示室無料の日(1月は6日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

1月の休館日
1日(水)～3日(金)

広告
毎週水曜日は
Meiカード ポイントプラスデー
Meiカード通常ポイント ＋ 3% ポイントプラス
※催事場、地階食品売場などやご奉仕品は、通常通りのポイントとさせていただきます。詳しくは売場係員におたずねください。
MEITETSU M'ZA めいてつ・エムザ
金沢 むさし TEL(076)260-1111(代)
www.meitetsumza.com
10時→20時(地階レストラン街・書籍は21時まで)
1月16日(木)より閉店時間が19時30分に変わります。

石川県立美術館だより
第363号〈毎月発行〉
2014年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町２番１号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/